第４５回　メディアとことば研究会　　「世界を読み解く報道の言葉」

13th Mar. 2015 大妻女子大　五十嵐浩司

Ⅰ．イントロダクション

1. 私がマス・メディアの現場から大学に移ったわけ

　・企業内教育（≒ＯＪＴ）だけでないジャーナリスト教育の必要性を感じたこと

　・「世界の出来事が日本の人々にきちんと伝わらない」と国際報道へ目を向ける教育の必要性を感じるとともに、国際報道のありようを考える必要があると考えたこと

　　→　「世界の動きを正しく理解し、日本の針路を選び取る力をつける」教育　←　本日のテーマ

1. 大学に正式に移って見方が変わった

　・メディア企業時代には「これほどきちんと書いてある国際報道（≒新聞。とりわけですが）をなぜ理解できないか」という「上から目線」

　　　　　　　　　　　　　↓

「大妻」という中堅大学で「とくにジャーナリストを目指すのではない」

「ふつうの」学生に接して感じたこと

　　　　　　　↓

　・もしかしたら国際報道のテーマ選択、伝え方、書き方が読者を遠ざけてはないか

→この10年ほどの推移を見ていると、とりわけウエブとの連携が進んだことにより、日本の国際報道が飛躍的な変化を遂げつつあることを十分認識しつつ、以下の点を指摘していきたい

Ⅱ．日本の国際報道の諸問題

1. 誰に向かって発信しているのか

　・現地からニュースを発信するときにしばしば「読者」として頭にあるもの＝外交官、研究者、同僚や同業他社の記者たち

→　一般読者への配慮の欠如

　 ←　国際問題はプロの外交専門家たちが中心となって判断し、政策を作る傾向が強いものだろうが、その政策立案を支える土台を形成する報道の役割

・新聞社でしばしば語られること「中学３年生が読んで理解できるように書く」（→　なぜ、中３なのか、義務教育修了程度ということなのか、説明されたことはないが、まあ、納得できる基準として受け入れられている）

　→　本当に中3を念頭に置いて書いている国際報道記事がどれだけあるのか

　→　3年間「朝日中学生新聞」（現「朝日中高生新聞」で国際問題の解説を連載して発見したこと

　　ｅg.　中学の教科書に「中東」は出てこず、「西アジア」と表現する　→　中3を読者に想定する新聞がまったく注釈なしで「中東」と表現するのはなぜか

　　　　　　←　「中東ぐらい知っているだろう」という上から目線の思い込み

1. 硬派ニュース偏向　　⇔　Newszak現象

　・国際ニュースの王道は「政治」「経済」「安全保障」「軍事」といった硬派ニュース

　　→「社会」「くらし」「芸術・文化」といったテーマは優先度が低い

　　→朝日新聞社の例でいえば、特派員で最も多いのは社会部系。しかし、国際報道の担当者になると、硬派ニュースへの傾斜が強まる

　　　　　　　　　　　　　↓

　・ウエッブ版やツイッターで「取材の途中経過」「居住地の身の回りの出来事」を報じることが多くなる

　　→報道する者の「生の声」が呼び起こす興味・関心

1. スペース（文字数）、時間の制限

・新聞　＝　緊密すぎる構成、漢字の多用　→　紋切り型の表現

・テレビ　＝　放送時間と視聴率　（→　視聴率調査がなくこの数年、硬派ニュースに力を入れていたＢＳテレビでも4月から、視聴率を限定的ながら導入）

　　　eg.1 朝日新聞「ニュースがわからん」（現「一からわかる」）発足時の記事に見る「分かりやすい文」と「わかりにくい文」

　　　　　ａ．分かりやすい事例　2006年4月6日付　「フランスの若者　何に怒ってデモ？」（富永格記者）＝資料Ａ

　　　　　ｂ．分かりにくい事例　2006年5月「病気腎移植　認めない方針なぜ」（久保佳子記者）＝資料Ｂ

eg. 2 紋切り型の言葉の多用

　　　　「イスラム原理主義過激派『イスラム国（ＩＳ）』」という用語を例に考える

* 正確さ

×　伝わりにくさ

　　　　→2014年度大妻女子大全学共通科目「政治と現代社会」イントロダクションでの「イスラム原理主義過激派」の説明

　　　　　　ⅰ）2014年4月にナイジェリアで起きた「ボコ・ハラム」による女子学生200人以上の誘拐事件

　　　　　　ⅱ）ＡＦＰ映像ニュースによる誘拐事件速報を見る

　　　　　　ⅲ）ロイター映像ニュースでボコ・ハラム幹部の演説を見る

　　　　　　ⅳ）上記２本の映像を見つつ、そこで出てきた言葉を書き留めさせており、それを指名した学生に発表させ板書

　　　　　　ⅴ）どの言葉がわからないかを確認しつつ言葉とその背景の説明＝資料Ｃ（パワポの該当部分を添付）

1. 無理な特ダネ化

・業界内過当競争の弊害　→　言葉の選択に大きく影響

eg.2000年１月14日付朝日新聞（東京本社版）朝刊１面トップ「外国人労働者　受け入れ拡大へ」の報道の日本語表現　＝　資料Ｄ

→無理な特ダネ化の弊害としての朝日新聞「福島第一原発事故　吉田調書記事」取り消し問題

1. 日本人関連ニュースのみを大きく取り上げる閉鎖性

　・日本メディアの大リーグ報道

　・ルワンダ内戦およびルワンダ大虐殺報道

　　＝資料Ｅ　1990年10月17日付朝日新聞（東京本社版）朝刊第1社会面「３人とも無事　ルワンダの邦人女性」

　　　　　　　1990年10月17日朝日新聞（東京本社版）夕刊第１社会面「ルワンダ内戦銃弾くぐった　邦人3女性と電話連絡」

　　　　　　　＋　ルワンダ大虐殺の初報、第２報

Ⅲ．学生たちに感じること

1. 世界史、日本史、政治・経済の基礎知識の欠如
2. 内向き志向　←　二極化

　・マイルド・ヤンキーの地元愛　　　　　　⇔　　　・ルワンダでインターンの学生たち

　・映画における「邦高洋低」現象

1. 言葉に実体が伴わない

←　想像する力の弱さ

　　共感する力の弱さ

　　→「イスラム原理主義過激派『イスラム国（ＩＳ）』」という用語から何を想像するか

Ⅳ．どう言葉にリアリティを持たせるのか　＝　学生が強く反応し、追体験や共感する力をみせた言葉や映像の事例を紹介する

1. 「ルワンダ大虐殺」の授業（「政治と現代社会」より）

　　ⅰ）ルワンダ大虐殺の記念館の写真

ⅱ）ルワンダとはどんな国かの概説

　　ⅲ）大虐殺とは何かの概説

　　ⅲ）映画『ホテル・ルワンダ』（2004年、テリー・ジョージ監督、米）の１シーン（約４分）

　　ⅳ）大虐殺の背景の解説

　　ⅴ）『ホテル・ルワンダ』の別の１シーン（約5分）

　　ⅵ）五十嵐がテリー・ジョージ監督と行ったインタビューの内容の解説　＝　資料Ｆ2005年2月16日朝日新聞朝刊「ルワンダ大虐殺　映画で論議再燃」

　　ⅶ）国連安保理第一次調査団メンバーとして虐殺直後にホテル「ミルコリンズ」（ホテル・ルワンダのモデル）入りした日本人政務官の講演（2012年度）など

　　ⅷ）「なぜ、ルワンダの大虐殺は世界に看過されたのか」の討論

　　→　学生の１０パーセント前後が「もっとも印象深かった」と挙げる映画の台詞「虐殺のニュースを流しても世界は助けてはくれない。『怖いね』というだけでディナーを続けるだけだ」

　　　　←　「想い」「共感」を掘り起こす可能性

1. 「メディア・ナショナリズムとメディアのナショナル・バイアス」の授業（「メディア・リテラシーⅡ」より）

割愛

資料Ｇ＝2012年韓国での「独島（竹島）フラッシュ・モブ・コンテスト」のポスター

1. 「９・１１後の世界と日本」の授業（「政治と現代社会」より）

割愛

Ⅴ．終わりに

　・伝わる国際報道を自覚的に作る必要性

　　　Newszakで指摘される対立項　　　hard news ⇔ soft news

light news

　　　獲得すべき技法　　　　　　　　　 hard news　対立せず　plain

intelligible